

## 296 当院におけるⅢ期肺腺癌手術例の検討

国立療養所松戸病院外科<sup>1</sup>, 内科<sup>2</sup>

○西山祥行<sup>1</sup>, 兼安秀人<sup>1</sup>, 西村光世<sup>1</sup>, 黒木基夫<sup>1</sup>,  
高橋健郎<sup>1</sup>, 佐々木拓子<sup>2</sup>, 浜田隆博<sup>2</sup>, 森川哲行<sup>2</sup>,  
広沢利幸<sup>2</sup>, 林辺 晃<sup>2</sup>, 児玉哲郎<sup>2</sup>, 西脇 裕<sup>2</sup>,  
北谷知己<sup>1</sup>, 松山智治<sup>1</sup>

目的：Ⅲ期肺腺癌手術例についてT, N因子別, 合併化学療法別による予後を検討した。

対象：昭和62年12月までに当院において手術したⅢ期肺腺癌90例について検討した。男54例, 女36例, 年齢は34才～81才(平均59.0才)で, 術後病期ではT<sub>3</sub>N<sub>0-1</sub> 15例, T<sub>4</sub>N<sub>0-1</sub> 8例, T<sub>1</sub>N<sub>2</sub> 17例, T<sub>2</sub>N<sub>2</sub> 27例, T<sub>3</sub>N<sub>2</sub> 12例, T<sub>4</sub>N<sub>2</sub> 10例, T<sub>2</sub>N<sub>3</sub> 1例であった。手術根治度は相対的治癒手術67例, 相対的非治癒手術5例, 絶対的非治癒手術18例であった。

結果：Ⅲ期肺腺癌全例の5年生存率は19%と不良である。これを根治度別にみると相対手術67例22%は絶対手術16例6%に比して有意に良好であるが, その5生率は満足できる値ではない。相対手術例のT, N因子別の5生率ではT<sub>1</sub>N<sub>2</sub>, T<sub>3</sub>N<sub>0</sub>例は各々44%, 51%と良好であるが, T<sub>3-4</sub>N<sub>2</sub>例は0%と不良である。これらの相対例の再発形式は80%が遠隔転移例であり, 手術前後の合併療法が重要である。当院においては年代順に術後にMMC(7例), CDDP+VDS(9例)を投与した例があるが, これらの5生率をみると24%, 28%と術後治療のない例16%に比べて有意な差ではない。そこで昭和61年よりこれら3剤の抗癌剤を術前・後に投与するNeoadjuvant chemotherapyを施行しており, これらの7例はまだ経過は短い, 現在まで良好な予後であり, 今後期待できる治療法と考えている。

## 298 シアル化型糖鎖抗原

長崎大学医学部第二内科

○廣田正毅

CA19-9およびシアル化SSEA-1(SLX)は, いずれもモノクローナル抗体(MCA)によって検出される腫瘍関連糖鎖抗原である。この2つの糖鎖抗原の構造はすでに明らかにされており, それぞれLewis<sup>a</sup>およびSSEA-1の末端にシアル酸を付加した糖鎖である。一方, われわれは, 米国UCLA外科との共同で, 各種の癌組織や癌細胞株を用いて144回の細胞融合を行った中から, シアル化Lewis<sup>x</sup>(SLEX)に対するMCAを得た。

SLEXはCA19-9の構造異性体にすぎず, SLXはSLEXにi抗原が結合した構造である。すなわち, これらの3つの抗原は構造上, 極めて類似した糖鎖である。

SLEXとCA19-9はただ単に立体構造が異なるだけであるが, 肺癌における分布は極めて異なり, CA19-9に比しSLEXはとくに肺腺癌において頻度が高い。

構造上, SLXはSLEXに比較し, より癌特異性が高いことが考えられる。そこで肺癌, 良性呼吸器疾患の血清および胸水を対象に検討を行ったが, 両者はほぼ同様の成績を示した。これまでシアル化型の糖鎖抗原は気道分泌液に多く含まれることから, これらの糖鎖抗原は慢性気道感染症やびまん性間質性肺炎において陽性頻度が高いことを報告してきたが, これらの点を考慮すればSLEXやSLXはとくに肺腺癌において臨床上有用な腫瘍マーカーである。

## 297 病理診断における腫瘍マーカーの役割

国立がんセンター研究所病理部

○広橋説雄, 下里幸雄

免疫組織化学的手法を用いて形態のうえに分子の同定を行うことにより, 病理診断の精度と価値が高められている。特に腫瘍診断においては, モノクローナルな増殖の確認, 良・悪性の鑑別, 転移癌の原発巣の推定, 腫瘍の分化と機能, 腫瘍の増殖能の検定, ホルモンや増殖因子レセプターの同定, 薬剤抵抗性の推定, 癌遺伝子産物の同定, 腫瘍免疫の検討などに現在既に実績を挙げあるいは今後の発展が期待されている。

種々の抗ヒトがんモノクローナル抗体の認識する抗原を整理すると, がん胎児性抗原, がん化に伴う糖鎖不全で生じる糖鎖抗原, 増殖因子レセプターや細胞接着蛋白その他特定の細胞系列に発現する分化抗原に大別され, 厳密にがん特異的な抗原は見い出されなかった。しかし, 特定の臓器ではがんに特異的な抗原もあり, がん・非がんの病理診断の補助として役立つ場合がある。さらに分化抗原を利用してがんの組織型の診断が分子レベルで可能なことが固形癌でも示された。ヒト細胞のがん化そしてprogressionにもがん遺伝子の関与が推定されているが, これら遺伝子の増幅, 突然変異そして産物の量の変化を病理組織レベルで検索することが可能となってきている。

今後ますます分子レベルでの病因の解明が, 疾病の診断に役立つ時期が迫りつつあると考える。

## 299 肺癌における腫瘍マーカーCA130

京都桂病院・呼吸器センター

○松原義人, 塩田哲広, 埴 健, 桂 敦史, 小鯖 覚  
石田久雄, 八木一之, 畠中陸郎, 船津武志, 池田貞雄

目的：CA130はヒト肺腺癌細胞株を用いて作製されたモノクローナル抗体が認識する糖蛋白で, 新しい腫瘍マーカーである。肺癌患者血清中のCA130を測定し, 主として腺癌に関する臨床的意義の検討を行った。

対象：昭和61年以降に入院した肺癌患者290例および対照群として昭和62年以降入院患者のうち主として60歳以上の非癌患者171例をretrospectiveに選んだ。なお同一血清のCEA, CA19-9, CA125, SLXも検討した。

成績：カットオフ値を35U/mlとするとCA130の陽性率は肺癌32%, 非癌23%で, 両者間に有意差を認められた(p<0.05)。肺癌組織型別の陽性率は腺癌120例で44%, 扁平上皮癌115例で17%, 小細胞癌36例で33%, 大細胞癌12例で42%, その他7例で29%であった。腺癌における病期別の陽性率はⅠ期12%, Ⅱ期25%, ⅢA期43%, ⅢB期59%, Ⅳ期52%であり, 扁平上皮癌の何れの病期よりも高率であった。

その他の腫瘍マーカーの肺腺癌における陽性率は, CEAは118例中44%, CA19-9は61例中30%, CA125は61例中44%, SLXは31例中52%で, それぞれ扁平上皮癌における陽性率よりも有意に高率であった。

結論：CA130は肺腺癌に高率に認められ, 既知の腫瘍マーカーに劣らない成績が得られた。今後さらに検討を加える必要はあるものの, CA130は肺腺癌に特異性の高い腫瘍マーカーとして有用と考えられる。